



環境報告書
2 0 1 0

国立大学法人
旭川医科大学



かけがえのない地球環境を守ることは
命と向き合う医療現場にとっての使命です。
だから、私たちは一丸となって環境保全へ行動します。

M E S S A G E 旭川医科大学長からのメッセージ

地域に根ざす医療・医療機関としての思い

旭川医科大学は、1973（昭和48）年の建学以来、地域に根ざした医療および福祉の向上を理念に掲げ、道北・道東地域における医学研究の拠点として重要な役割を担ってきました。

特に、地域間の医療格差是正を目指して、1999（平成11）年、全国に先駆けて設置した遠隔医療センターは、現在までに日本国内の他、アジアやアメリカなど国外へも拡大し、いまや50を超える国内外の医療機関とネットワークを形成しています。

これら最先端ICT技術が融合した施設と共に、本学が誇るかけがえのない「宝」と言えるのが、遙か大雪山連峰の山並みを望む豊かな自然環境です。寒暖差60℃を超える厳しい気候風土が、四季折々を通じてドラマチックな風景を演出しています。

人間の過ちが、自然環境を変えていく

とはいえ、加速する地球温暖化の影響から、私たちの街もまた逃れることができません。旭川は、1902（明治35）年1月に、正式の気象観測所の記録としては日本の最低温度となる、-41℃を記録した地としても広く知られていますが、近年の最低気温は-25℃前後となっていて、平均して、ここ100年で10℃ほど上昇していると考えられています。

環境の急激な変化をもたらしたのは、私たち人間の所業です。

振り返ってみれば、この地球の歴史は、人間が引き起こした過ちによって、しばしば大きな代償を支払われてきた歩みでもあります。今年発生した、史上最悪と言われるメキシコ湾での原油流出の惨事は、人間の傲慢さと、それに対する代償の怖さを見せてつけています。

「守る環境」から、「実践する環境」へ

地球規模で考え、地域で行動していくには、どうすればいいのか。

次世代へと命をつなぐ、この「かけがえのない地球環境を守っていくこと」は、命と向き合う医療現場に身を置く私たちにとっても、極めて重要な使命です。

建学精神の原点に立ち、教育・研究の分野で教職員が一丸となって新たなチャレンジを続けていくと共に、地球環境の保全という高い目標のために、私たち大学人が、自らの責任を自覚し、日々の具体的行動へとつなげていくことを、ここに改めて宣言いたします。



国立大学法人 旭川医科大学長
最高環境責任者

吉田 晃敏

CONTENTS

- 01 旭川医科大学長からのメッセージ
- 03 CONTENTS
表紙の花について
- 04 旭川医科大学環境方針
旭川医科大学学章
- 特集:社会貢献の歩みとこれから
- 05 旭川医科大学の挑戦
- Theme1 医療・教育のネットワーク化
Theme2 地域医療の充実を目指して
Theme3 働きやすい病院づくり
Theme4 地域に健康の知識を伝える
- 12 2009年度 旭川医科大学TOPICS
- 13 大学概要
- 位置図・キャンパスマップ
組織機構図
法人役員数等
大学教育及び病院理念と目標
実施体制
環境目標及び実施計画並びに評価結果(平成21年度)

- 17 大学における社会・環境への貢献
- 教育・研究における社会・環境への配慮
エキノコックス症の研究:北海道から全世界へ
学生に対する環境関連の教育
旭川ウェルビーイング・コンソーシアム「健康体感教室」
AWBC学生組織「はしつくす」の環境関連の活動
JICAアフリカ地域・地域衛生担当官のための保健行政
環境関連調査
シックハウス症候群の研究—全国疫学研究への参加
- 社会・環境コミュニケーション
旭川医科大学派遣講座実施状況
旭川地域における社会貢献
- 25 病院における社会・環境への貢献
- 地域がん診療連携拠点病院としての活動
みなさまの声を聞くために
- 27 事業活動にともなう環境負荷低減への取り組み
- 太陽光発電について
グリーン購入・調達状況など
エネルギー・資源の使用量
- 29 監事評価
- 30 大学機関別認証評価
結び
編集後記

—表紙の花について—



エゾタカネスミレ
大雪、夕張、日高山系と羊蹄山に生える多年草で、緑のない隙地を好む。黄色の花はよくめだち、遠くからでもすぐにそれとわかる。



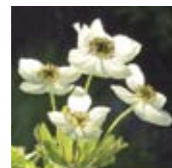
エゾノツガザクラ
高さ5~30cmの常緑小低木で、森林限界よりも高所に生育する。花が咲いていないと低木の針葉樹と見誤る。



ミヤマリンドウ
低山から亜高山帯の、日当たりが良く背の低い草地に生える。背丈10cm程度の多年草。遅めに咲く花で、茎先端に複数咲かせる事が多い。



エゾオヤマノエンドウ
表大雪と北大雪の礫地に生える多年草。花が終われば、エンドウ豆そのものの立派な実をつけ、これもなかなか可愛い。



エゾノハクサンイチゲ
高山の草地に生える多年草。7月はじめに北海道各地の高山で満開となったエゾノハクサンイチゲの群落を目にすることができる。



イワウメ
高山帯の岩礫地や岩壁に絨毯のように広がって生える。6~7月に枝先から伸びた花柄上に梅に似た2cmほどの花をつける。



メアカンキンバイ
北海道の高山の礫地に生育する多年草。レモンイエローの花と、深く切れこみの入った淡緑色の葉が特徴。



ヨツバシオガマ
高山帯の草地に生える多年草。葉は通常、節ごとに4枚輪生し、羽状に深裂する。紅紫色の花が4個ずつ数段に輪生し花穂が長くなる。

旭川医科大学環境方針

基本理念

旭川医科大学は、自然豊かな北海道の北部・東部の中心にあり、その教育・研究及び診療などに伴う全ての活動において、人と自然が調和した社会環境の保全・改善のために配慮が必要と考え、常に環境に配慮した取り組みを目指します。

基本方針

旭川医科大学は、基本理念を実現するために、以下のことについて実施します。

- 1 本学における教育、研究及び診療において、人と自然が調和した社会の環境を保全・改善することに努めます。
- 2 地球環境の保全・改善のため、地域社会との連携を強め環境問題の解決に努めます。
- 3 環境関連法規、条例及び協定を遵守するとともに、環境に与える負荷の低減に努めます。
- 4 この環境方針を達成するために、職員及び学生などと協力して環境に配慮した取り組みの実施体制を確立するとともに環境目標を設定し、広く公開します。

平成22年9月
国立大学法人 旭川医科大学長 吉田 晃敏



旭川医科大学学章

雪の結晶により北海道を、
旭川市民の木「ナナカマド」により旭川をイメージすることができ、
その中央の医大の文字により、
北海道の中央にある「旭川医科大学」をイメージしています。

環境報告書の作成に当たって

この「旭川医科大学環境報告書2010」は以下により作成しています。

- 参考にしたガイドライン/環境省「環境報告ガイドライン2007年度版」
- 対象組織/旭川医科大学
- 対象期間/平成21年4月~平成22年3月
- 発行期日/平成22年9月
- 次回発行予定/平成23年9月

作成部署
お問い合わせ先

旭川医科大学総務部施設課
〒078-8510 旭川市緑が丘東2条1丁目1番1号
TEL (0166) 68-2165 FAX (0166) 68-2169
E-mail/oga227@jimu.asahikawa-med.ac.jp
この環境報告書はホームページでも公表しています。
HPアドレス <http://www.asahikawa-med.ac.jp/>

旭川医科大学の挑戦

[特集] 社会貢献の歩みとこれから

旭川医科大学がこれまで挑戦してきたことは、未来に描く、地域医療の姿を実現するための一歩です。それは遠隔地まで、高度医療と健康のための情報を行き届かせることと、地域に根付き、医療面で安心を築くために貢献すること、その二つを柱に、旭川医科大学は理想の実現へと歩みを進めています。

Theme 1

医療・教育のネットワーク化

地域医療の理想の形は、どこにいても高度な医療を受けられることであり、それを医師不足の中で実現するための方法が、「情報を動かす」ことです。地方とネットワークを構築し、医療を提供する遠隔医療の研究や、地域住民に健康に関する情報を届ける遠隔教育を実施しています。

情報技術が地域医療を変える

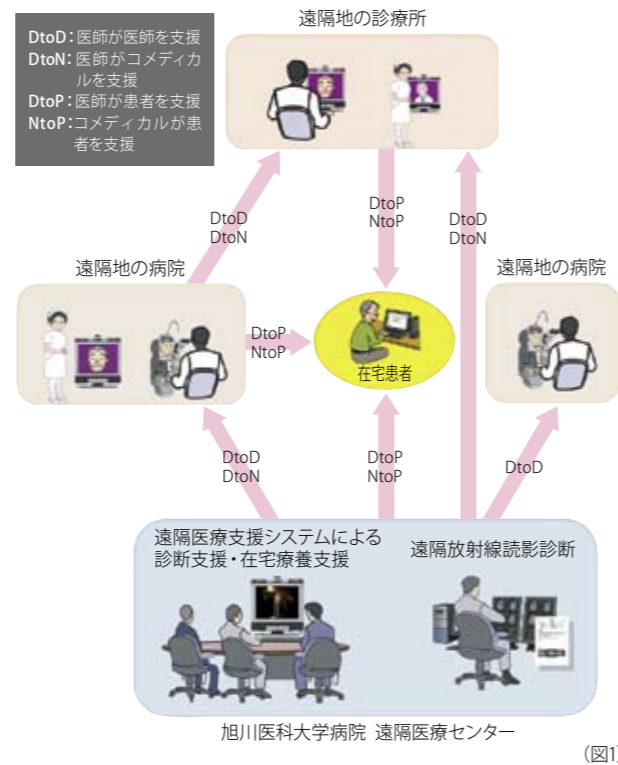
医師不足の現在、都市部と地方で医療の格差が広がっています。専門医がいなくて診療を受けられず、重症化するまで病気が見つからないことや、高度な治療を受けるために都市部まで長距離の移動が必要になることなど、地方に住む人は不利な状況に置かれています。都市も地方も同じ質の医療を受けられるのが地域医療の理想であり、実現しなくてはならない課題です。

人の移動には限界があります。しかし現在、情報化は進み、ネットワークを築けば世界中のどこでもつながることができます。旭川医科大学では、このつながりを医療にも導入し、離れた病院や患者宅と診療情報をやりとりして質の高い医療を届ける遠隔医療について研究を進めています。

「遠隔医療モデルプロジェクト」の開始

旭川医科大学病院は、遠隔地の病院からリアルタイムに送られてくる検査・手術の画像を元に、診断や手術の支援を行う遠隔医療に1994年から取り組んでおり、1999年7月には、国内唯一の遠隔医療センターが供用を開始しました。

この取り組みが国にも認められ、2008年、総務省からの委託を受けて本学が推進する遠隔医療を全国へ普及させるための「遠隔医療モデルプロジェクト」を開始しました。このプロジェクトでは、遠隔医療の実施形態を4種類(図1参照)に分類し、それぞれの有効性について評価・検証を進めています。また、遠隔医療が広く普及した場合の経済的効果や、患者様を対象とした遠隔医療に関する意識調査なども行っています。



(図1)

プロジェクトによる評価から

DtoDやDtoP/NtoPなどの遠隔医療については、本学遠隔医療センターと北海道内の病院及び患者様の自宅とを通信回線で接続し、医学的・工学的観点から遠隔医療が有効であることを証明しました。

また、遠隔医療が患者・医療機関・地域にもたらす経済効果を定量的に検証したところ、眼科は年間10億円以上、放射線画像診断については年間16~18億円の経済効果があることが明らかになりました。

北海道内の5医療機関の外来患者328人を対象としたアンケート調査では、大半の患者様が遠隔医療を利用したいと思うと回答し、産婦人科と小児科を受診した患者様については全員が遠隔医療による診断を希望していることがわかりました。

ネットワークを啓発活動にも活用

地域の医療従事者や市民に、最新の医療知識・技術や健康に関する情報を提供し、知識と信頼を深める活動にもネットワークを活用しています。

旭川医科大学病院では、旭川市をはじめとして上川町、美瑛町、利尻町、羽幌町など21カ所をインターネットのテレビ会議システムで結び、講演者に対して遠隔地から直接質問等が可能な公開講座形式の「北海道メディカルミュージアム」を形成しています。

北海道メディカルミュージアムが地域医療を向上させる

この北海道メディカルミュージアムは、2004年3月より年4回、合計20回開催され、延べ2,000名以上の地域の医療従事者や市民が参加しました。医学の最新知識等に触れ、直接疑問等に応えてもらえる貴重な機会として高く評価されています。

また、講座の内容をビデオ収録し、旭川医科大学のホームページで動画として無料で公開しており、当日参加できなくても講座の内容について学べるよう配慮しています。

北海道メディカルミュージアムは、大学病院と自治体等が共同で行う社会貢献事業として、旭川医科大学病院が掲げる「地域医療に根ざした医療・福祉の向上に貢献する」という理念を体現する極めて重要な事業です。今後も、道内の医療従事者や住民に対して、身近な医療に関する知識や情報を提供することで、遠隔医療による生涯教育を広めていきたいと思えます。

北海道メディカルミュージアムの実施方針

- 医学、医療、福祉等の観点から、住民への遠隔教育、情報サービスを提供。
- 多地点に情報を配信しながらも、リアルタイムで質疑応答を可能にする。
- ビデオ画像や静止画像を駆使した、理解しやすい解説内容。
- 各地の受講者層の幅を広げ、それぞれに合わせた内容を企画。
- 一方的講義を避け、クロストークや挙手等の参加型を目指す。

2009年度の実施状況

第16回開催 2009年6月



「白内障の原因と症状・治療」

第17回開催 2009年10月

「新型H1N1インフルエンザー知ることがかからない対策」

第18回開催 2009年12月

「がん治療におけるPET-CTの役割」

第19回開催 2010年3月

「北海道に多いシラカンパ花粉症と口腔アレルギー症候群」

第20回開催 2010年6月



「ほっておくと怖い、イビキと睡眠時無呼吸 -あなたは本当に眠っていますか?-」

北海道メディカルミュージアムのURL
<http://www.u-p.co.jp/hmm/>

Theme 2 地域医療の充実を目指して

地域医療の担い手を育成するため、大学教育の枠を超え、さまざまな機関と連携して、地域に根付く医療人を育成しています。それと共に、今ある医療格差を少しでも是正するために病院の機能を上げ、より手厚い医療を地域に提供する体制づくりにも力を発揮しています。

ふるさとに根付いた医療人を育成する

旭川医科大学は、創設の歴史からも、地域医療を支える拠点としての役割と、地域社会に貢献できる人材を育てる役割を持っています。医育機関としての旭川医科大学の担う使命は、地域社会において的確に問題点を抽出し、医療人として行動できるプロフェッショナルを育成することです。これまで「高大連携」や高校生のインターンシップなどは、個別に行われてきました。しかし、医学部への進学は、医師という職業選択であるという視点からは、個々の取組の有機的連携がのぞまれていました。旭川医科大学は、この点を改善するために2008年度から「高大病連携によるふるさと医療人育成」を目指し「医療体験実習」と「高大連携」を融合した取り組みを開始しました。

この取り組みは「医療人の育成は高校生の時から始まる」という思いが基にあります。医療人としてのプロフェッショナルリズムに触れてもらえるよう、現場体験と講演会やワークショップなどを連動して行い、人と人とのつながりを作ることに重点を置きました。地域と、そこに生活する人々を見ずに医療は成り立たないことを実感してもらうためです。医師志望者だけでなく、他の医療職を目指す高校生にも参加してもらっています。

それに加え、人材育成には「継続」と「一貫性」が必要であることを意識しています。2008年度入試には地域枠推薦入試を、2009年度入試にはAO入試北海道地域枠を設けることによって、地元出身の入学者が増えています。また医学科・看護学科のカリキュラム変更で、第1・2学年に北海道内の地域医療を題材とした実習を取り入れ、2009年度には医学科に「地域医療教育学講座」を開設しています。そして医学科卒業後の研修においても「北海道」を意識した研修カリキュラムを準備中です。

■「高大病連携ふるさと医療人育成への取り組み」参加者（2009年度）

高等学校	13校
医療・福祉施設	13施設
実習参加高校生	196名



高大病連携共同シンポジウムの様子



高校生の職場体験

高度医療人育成のためのさまざまな取り組み

地域医療を活性化させるためには、高度医療人の養成が各医育機関に求められています。そこで旭川医科大学は、道内外の医育機関と連携して得意分野で補完を図り、専門医や臨床研究者の育成を目指す各プログラムを実施しています。

特に北海道での死亡率が高いがんに対しては、職能団体や行政、道内各地のがん診療連携拠点病院とも連携を図り、高い専門性を持った「がんプロフェッショナル」の育成に取り組んでいます。旭川医科大学は医師やコメディカル養成コースのほか、専門医の研修プログラムを札幌医大・北海道大と共同で運営しています。

病院機能と医療体制の充実に向けた取り組み

旭川医科大学病院においても、診療部やセンターを整備して病院機能の向上に努めています。例えば、がん治療の向上を目指した腫瘍センター（2007年度）や緩和ケア診療部（2009年度）の設置、全国的に不足する呼吸器専門医の育成を目指した呼吸器センターの設立（2008年度）など、地域や全国における医療ニーズの高まりに合わせた整備を進めています。

また、老朽化の進む施設更新も必要です。2008年度より始めた総合研究棟（旧基礎臨床研究棟）については、教育研究スペースの集約化、弾力的・流動的に運用できる共用スペースの確保、安全・安心な教育研究環境の整備、アメニティーの向上を目指した改修工事を行い、2009年度までに臨床医学講座の約半数までを終了しました。

地域医療の拠点病院としての取り組み

2009年4月、旭川医科大学病院は、地域がん診療連携拠点病院に指定され、地域のがん診療の拠点として研修会の開催や、がん診療の相談などの活動を開始しました。さらに、2009年10月には、北海道から「北海道高度がん診療中核病院」に認定されました。この指定は北海道内の3医育大学（旭川医科大学、北海道大学、札幌医科大学）が受けていて、その役割は①高度先進医療の提供や高度の医療技術の開発及び評価、②放射線療法や化学療法などの高度がん医療に関する研修、③がん診療の担い手となる高度な知識・技術を持つ専門医及びコメディカルスタッフの育成、④他のがん診療連携拠点病院などへの診療支援を行う医師の派遣とされ、医育大学としての人材育成に大きな期待が寄せられています。

また、2009年8月に、国内最大の感染症である肝炎に対する国の施策「肝炎治療7カ年計画」に基づき、北海道から「肝炎診療連携拠点病院」に指定されました。この指定の目的

は肝炎に係る地域の医療水準の向上を図ることです。その役割は①肝炎に係る医療情報、②北海道内の専門医療機関等に関する情報の収集や提供、③医療従事者や地域住民を対象とした研修・講演会の開催、④肝炎患者からの医療相談・支援などとされ、2010年度には肝炎患者からの医療相談・支援窓口の設置等を行う予定となっています。

旭川医科大学病院は、これからも地域の期待に応え、拠点病院としての活動を充実させていきます。（P23参照）

道北ドクターヘリ 協力基幹病院として

2008年度から、道北ドクターヘリ導入に向けての誘致活動が本格化しました。本学は2008年8月28日に立ち上げられた「道北ドクターヘリ運航調整委員会」に役員として全面協力し、知事への要望書提出など、誘致活動に取り組みました。その結果、2009年度に厚生労働省及び北海道のご支援により、旭川を基点とした道北地区と、釧路を基点とした道東地区の2医療圏にドクターヘリ導入促進事業が承認されました。

本院は協力基幹病院となり、本学が無償提供した敷地に、道北地域55市町村からの寄附と事業実施主体である旭川赤十字院の負担による格納庫を、また、本学負担によりヘリポートを整備し、どのような状況にも対応可能な万全な体制としました。



旭川医科大学敷地内に造ったヘリポートと格納庫

Theme 3 働きやすい病院づくり

地域医療を苦しめる人手不足を解消するためには、新しく育てるだけでなく、今いる医療人を減らさないことも大切です。職員が抱える悩みや問題に大学・病院が向き合ってサポート体制を築き、ワーク・ライフ・バランスを実現する職場をつくっています。

人手不足解消の鍵は女性医療人

医師や看護師など、医療に関する人手が不足している原因には、長時間にわたる勤務など、労働環境の悪化があります。特に出産や育児、介護を抱える女性医療人は、激務との両立が困難となり、離職してしまうケースが全国で多く見られています。

女性医療人の離職を止めることが、人手不足を緩和します。さらに、離職した人たちが現場復帰できれば、経験のある人材を多く医療に取り戻せます。そのためには家庭と仕事を両立できる職場環境づくりや、復職の支援が必要です。

その支援のため、文部科学省の採択を受け2007年10月に復職・子育て・介護支援センター「二輪草センター」が設立されました。2010年4月からは学内共同利用施設として支援業務を行っています。

復職前後に手厚いサポート

センターの活動は「復職支援研修部門」「子育て・介護支援部門」「病後児保育部門」の三つの部門からなっています。

「復職支援研修部門」では、医師・看護師の資格を持ちながら休業中または休業を予定している人に潜在人材登録をしていただき、情報の提供や復職に必要な支援を「5段階復職支援教育プログラム」として提供しています。2010年度までにこのシステムを利用して復職した人数は医師2名、看護師15名で年々増加傾向にあり、職場定着率も上がっています。

さらに、現場の医師や看護師たちには復職後のサポートの一環としてセミナーや講習会を行っています。2009年度から、幅広いテーマでセミナーを開催するため、「子育て支援セミナー」を「二輪草セミナー」に変更しました。

「二輪草セミナー」開催記録

2009年5月

講師 柴田千恵子師長(7階西病棟)
「介護を体験して～仕事と介護の両立の中で思うこと～」



2009年9月

講師 高橋英俊先生(皮膚科 講師)
「男性医師の子育て奮闘記～仕事も子育てもやる時はやる、父親の生き方～」



2009年11月

講師 尾崎孝志氏(医療法人社団旭川圭泉会病院 居宅介護支援事業所 圭泉会ケアセンター-管理者兼主任 介護支援専門員)
「介護サービスの基礎知識」



2010年2月

講師 外川恵子師長(8階西病棟 看護師長)
「おひとりさまの介護奮闘記～看護師として家族ゆえに～」



「おひとりさまの介護奮闘記～看護師として家族ゆえに～」

トラブルに対応する勤務体制へ

「子育て・介護支援部門」では、女性医療人の離職を防ぐサポート体制を整えています。2008年から、子どもの病気などで急な早退や欠勤を希望するときに、その人の業務を担うバックアップナースシステム、引き継ぎまでの病児一時預かり室を稼働して、子どもが病気のとときの職員をフォローする仕組みができました。バックアップナースシステムを利用できる対象は子どもが就学前の場合でしたが、2009年4月からは小学校3年生までに対象を拡大しました。

また2008年、学童保育サポートを開始しました。夏・冬休みの「キッズスクール」では、ボランティア学生が多数参加し、子どもたちと交流しています。同時に高学年向けには、職場体験を企画し、病院内で見学・体験学習を行っています。さらに旭川市の子育て支援制度や専門機関との連携窓口となり、悩み相談カウンセリング室としての役割を担っています。

「病後児保育部門」では2009年12月に病後児保育室「のんの」を開設し、さらに充実したサポートシステムとなりました(P12参照)。



キッズスクールに参加したボランティア学生



冬休みキッズスクールの職場体験の様子

人材確保とさらなる支援に向けて

これらの取り組みにより、特に看護職員において結婚、出産を理由に退職することがほとんど無くなりました。同時に育児休業や育児部分休業の取得者数も増えています。

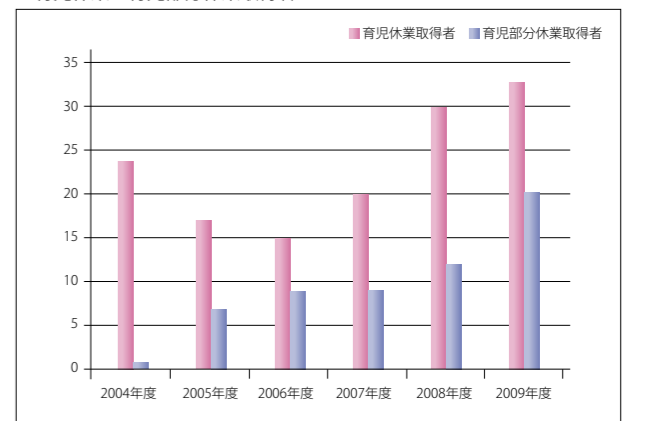
また、医師不足への対策として、合同入局説明会により、各診療科の勤務体制やキャリアアップ、女性医師への支援状況などのパネル展示や説明を行っています。さらに説明会では、女子学生が考える働きやすい職場について発表を行うとともに、毎年4名の教授と学生とのパネルディスカッションを開催し、大学が一丸となって医師を確保する動きが現れています。



合同入局説明会

現在は介護に関するアンケート調査を行い、今後は介護支援についても検討していく予定です。復職・子育て・介護のサポート体制を整えていくことで、女性医療人だけでなく男性やさまざまな立場の方にとっても働きやすい環境を実現し、医師不足の解消につなげていきます。

■ 育児休業・育児部分休業取得者



Theme 4 地域に健康の知識を伝える

治療だけでなく、病気を予防することも医療の役割です。
 病気について、病気にかからない生活について知識を伝える、
 地域住民への啓発活動を続けてきた旭川医科大学は、
 地域連携のもとに、さらなる情報発信の強化を図っています。

病気・医療に関する公開講座

予防の知識不足や生活習慣の乱れは、病気の原因となります。また、病気になった後も、知識がないと、発見が遅れて重症化してしまうことがあります。地域住民の健康を守るためには、病気にかかってからの治療だけでなく、かかる前の予防や、定期的な検査・健診を促すことも重要です。

旭川医科大学では、毎年主に本学で行う公開講座や、北海道内の自治体へ向く派遣講座(P23参照)を行ってきました。病気や治療・検査について知識を深めたり、生活習慣の見直しを勧めたりと多彩な内容の講座を展開しています。

そこから一歩進み、より強力な情報発信を行うことを目指し、地域の他の機関と連携を図ってきました。

旭川ウェルビーイング・コンソーシアムの結成

旭川市内の高等教育機関(旭川医科大学、旭川大学、旭川女子短期大学部、東海大学旭川校舎、北海道教育大学旭川校、旭川工業高等専門学校)および旭川市と連携し、2008年5月に「旭川ウェルビーイング・コンソーシアム」(以下AWBC)を設立しました。この活動は文部科学省2009年度「大学教育充実のための戦略的大学連携支援プログラム」に選定され、「未来を拓く地域人材育成を目指す異分野大学連携による旭川キャンパス」として活動しています。これらの代表校を旭川医科大学が担っています。

AWBCは公設研究機関や地元の産業界とも協働し、旭川エリアの自然環境や温泉、農畜産物など健康保養資源を元に、住民の身体的・精神的な健康(ウェルビーイング)の達成と教育・地域振興を図り、その実現に取り組むことを目的としています。

具体的には①学生間の単位互換や共同教育科目の設定、②市民向けの連携公開講座の実施、③産学官民の異業種交流会の開催、④共同研究の実施等を進めて地域貢献を推進していくこととしています。

旭川の新たな健康・教育・地域振興の拠点

2009年には、AWBCのサテライトキャンパスとして教育ネットワーク旭川サテライトキャンパス「HI・RO・BA」(P12 参照)を開設しました。駅前の人が集まる場所で公開講座を行うことは、今まで触れ合うことのなかった方々とのつながりを作ります。

AWBCの活動により、地域住民の健康の保持・増進から、旭川の街自体の活性化というさらに広い範囲の地域貢献に関わっていききたいと思います。

活動の詳細はウェブサイトをご参照ください。

<http://www.asahikawa-med.ac.jp/conso/>

「ウェルネットリンク」サービスの開始

健康管理の重要性の高まりを受け、旭川医科大学では独自に会員制の健康情報管理システム「ウェルネットリンク」を開発し、2009年12月1日に旭川市で運用が開始されました。このシステムは、インターネットを利用して健康診断の結果や通院履歴などの医療情報を自分で簡単に管理することができ、さらに体質や状態に合わせて「食」や「運動」などのサポート情報を受けられます。医療情報を扱うため、高度なセキュリティを確保しながらも、誰もが使いやすいシステムとしました。この「ウェルネットリンク」をもって、地域の健康を守るだけでなく、ライフスタイルを豊かにする情報発信へとつなげています。



2009年度旭川医科大学TOPICS

2009年度に行った主な取り組みを紹介いたします。

国際交流センター開所
 【2009年5月18日】



吉田晃敏学長が「情報通信月間」総務大臣表彰を受賞
 【2009年6月1日】

「未来を拓く地域人材育成を目指す異分野大学連携による旭川キャンパス」が平成21年度大学教育充実のための戦略的大学連携支援プログラムに採択
 【2009年7月14日】

教育ネットワーク旭川サテライトキャンパス「HI・RO・BA」オープン
 【2009年10月1日】

中学・高校生をはじめ地域の皆様への発信拠点として、旭川買物公園に面した立ち寄り易い場所に教育ネットワーク旭川サテライトキャンパス「HI・RO・BA(広場)」をオープンしました。旭川地域の5大学、1高専の情報発信基地及び出前授業や講演会などコンソーシアムメンバーの公開広場として広く活用しています。



ドクターヘリ ヘリポート完成
 【2009年11月30日】

道北ドクターヘリは、基地病院である旭川赤十字病院を中心に運航していますが、雪害対策として格納庫などの整備は必須でした。そのため、敷地がない旭川赤十字病院に替わり、本学が敷地を無償提供し、整備しました。その際、ヘリポート・給油施設も合わせて整備し、ドクターヘリ事業に対しどのような状況にも対応可能になりました。



病院前でイルミネーションを実施
 【2009年12月1日】

旭川医科大学病院では2009年12月1日から42日間、「イルミネーション」を設置しました。病院前のバスロータリーなどを利用し、LED電球7,000個を使用して飾り付け、本院に通院・入院される患者さま、地域住民のみならず、病院スタッフや本学職員・学生へ心休まる明かりによる癒しを提供するものです。



病後児保育室「のんの」開設
 【2009年12月24日】

「子どもが病気の時はそばにいてあげたい」という親のため、交替できない業務があるときにお子さんをお預かりする目的で開設したのが病後児保育室「のんの」です。この名前は公募により決めたもので、アイヌ語で花を意味します。2010年6月現在で、事前登録者数は64名となりました。利用者からは好評の声を頂いています。



渡辺周総務副大臣が旭川医科大学病院遠隔医療センターを視察
 【2009年12月24日】

地域医療教育学講座を設置
 【2010年2月17日】

脳機能医工学研究センターを設置
 【2010年3月24日】

大学概要

旭川医科大学は道北・道東の中心に位置し、豊かな自然の中で活動しています。
 全学をあげて環境に配慮した事業活動を行うとともに、人と自然の調和を目指す医療人の育成に取り組んでいます。



(エソタカネスミレ)
 大雪、夕張、日高山系と羊蹄山に生える多年草で、緑のない裸地を好む。黄色の花はよくめだち、遠くからでもすぐにそれとわかる。

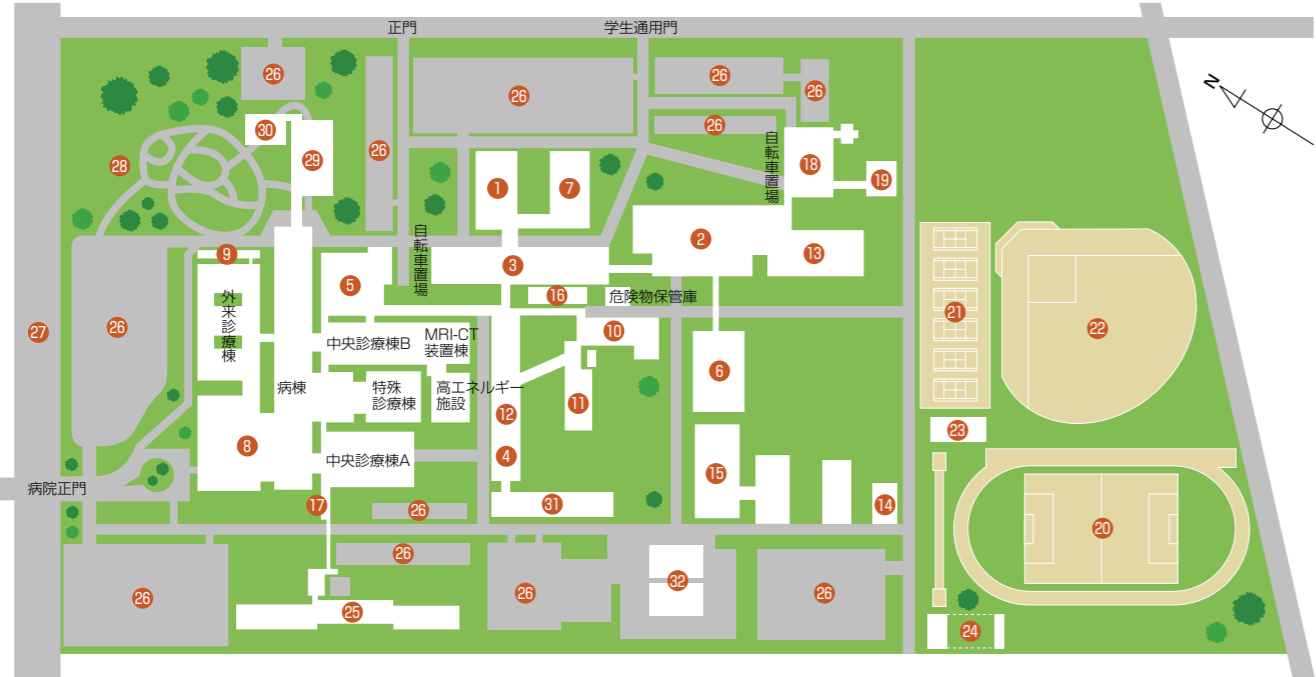


位置図

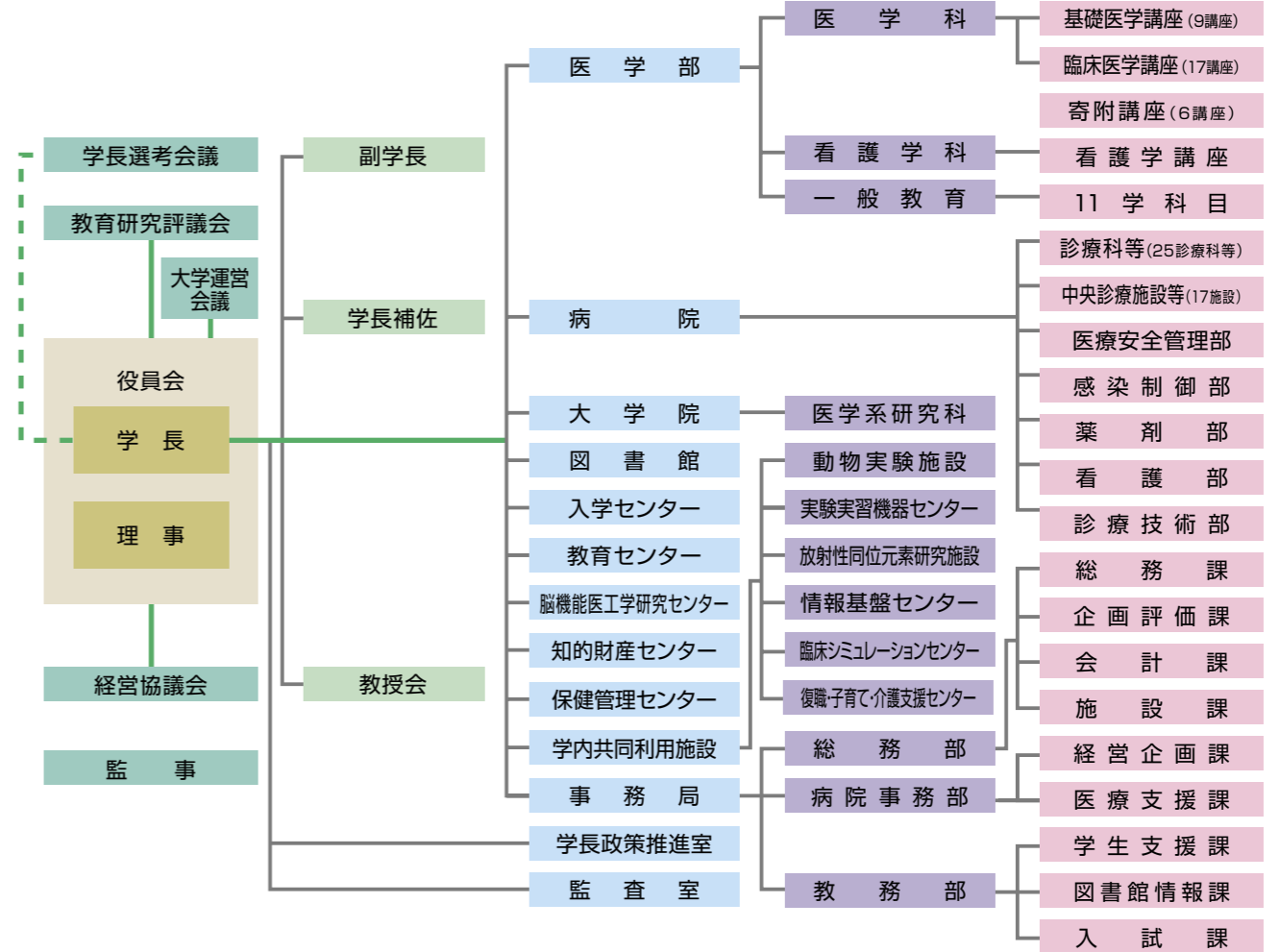


キャンパスマップ

- 1 本部管理棟
- 2 講義実習棟
- 3 総合研究棟
- 4 臨床研究棟
- 5 臨床講義棟
- 6 看護学科棟
- 7 図書館
- 8 病院
- 9 遠隔医療センター
- 10 動物実験施設
- 11 放射性同位元素研究施設
- 12 実験実習機器センター
- 13 福利厚生施設
- 14 犬舎
- 15 中央機械室
- 16 廃棄物保管庫1
- 17 廃棄物保管庫2
- 18 体育館
- 19 武道場
- 20 陸上競技場
- 21 テニスコート
- 22 野球場
- 23 体育管理施設
- 24 弓道場
- 25 看護師宿舎
- 26 駐車場
- 27 環状1号線
- 28 屋外リハビリテーション施設
- 29 共通棟
- 30 保育所
- 31 共用研究棟
- 32 ドクターヘリヘリポート



組織機構図



法人役員数等

平成22年5月1日現在

■法人役員数

学長	理事	監事	計
1	4 (1)	2 (1)	7 (2)

※ () 内は非常勤役員で内数。

■大学職員数

学長	副学長	教授	准教授	講師	助教	事務・技術職員	技能・労務職員	医療技術職員	看護職員	合計
1	(2) 2	53	37	50	138	169	9	77	541	(2) 1,077

※ () 内は教授と兼務で外数。法人役員(学長・副学長)を含む。

■学部学生数

区分	入学定員	1学年	2学年	3学年	4学年	5学年	6学年	計
医学科	122	122	109	94	103	92	95	615
看護学科	70	61	61	71	68			261
計		183	170	165	171	92	95	876

■大学院学生数

区分	入学定員	1学年	2学年	3学年	4学年	計
博士課程	15	21	20	29	32	102
修士課程	16	13	25			38



〈エゾノツバキザクラ〉
高さ5～30cmの常緑小低木で、森林限界よりも高所に生育する。
花が咲いていないと低木の針葉樹と見誤る。



大学教育及び病院理念と目標

大学の教育理念

豊かな人間性と幅広い学問的視野を有し、生命の尊厳と高い倫理観を持ち、高度な知識・技術を身につけた医療人及び研究者を育成する。また、地域医療に根ざした医療・福祉の向上に貢献する医療者を育てる。さらに、教育、研究、医療活動を通じて国際社会の発展に寄与する医師及び看護職者の養成に努める。

大学の教育目標

旭川医科大学は上記の理念の下にこれらを達成するため、次のような目標を掲げる。

1. 幅広い教養とモラルを養うことにより、豊かな人間性を形成する。
2. 生命の尊厳と医の倫理をわきまえる能力を養い、病める人を思い遣る心を育てる。
3. 全人的な医療人能力や高度な専門知識を得るとともに、生涯に亘る学習・研究能力を身につける。
4. 幅広いコミュニケーション能力を持ち、安全管理・チーム医療を実践する資質を身につける。
5. 地域・僻地住民の医療や福祉を理解し、それらに十分貢献しうる意欲と能力を獲得する。
6. 積極的な国際交流や国際貢献のための幅広い視野と能力を習得する。

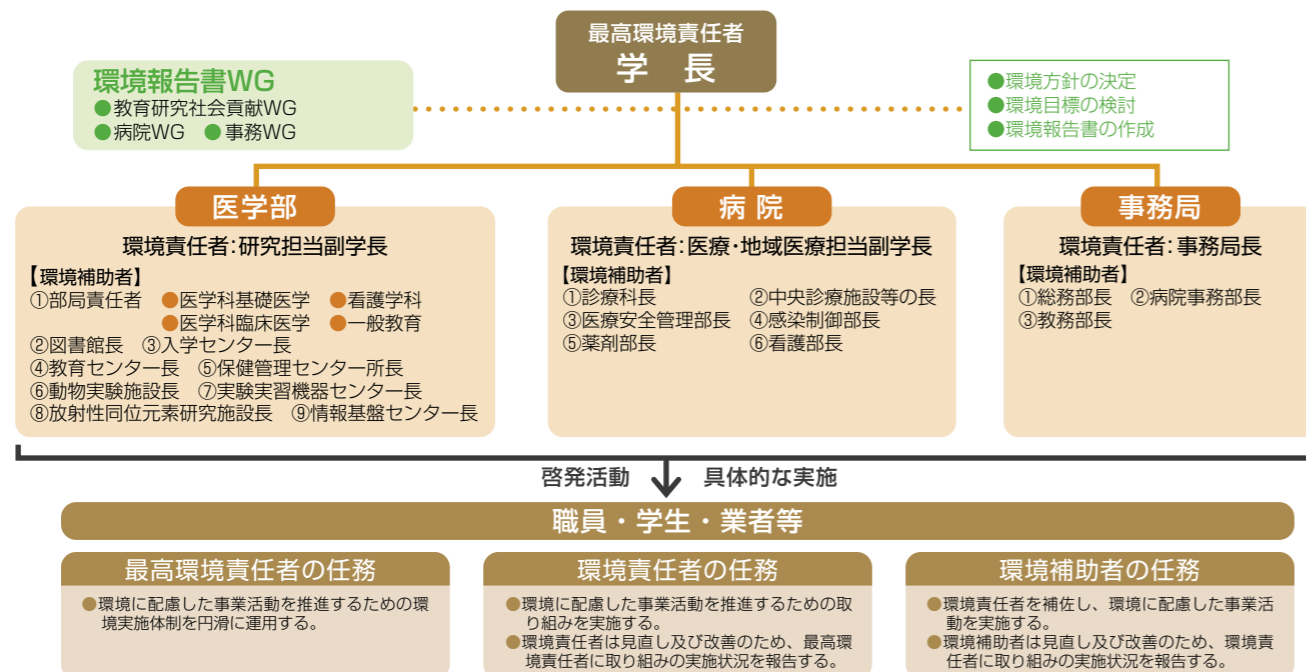
病院の基本理念

大学病院としての使命を認識し、病める人の人権や生命の尊厳を重視した先進医療を行うとともに、次代を担う国際的にも活躍できる医療人を育成する。

病院の目標

1. 病める人を思い遣る患者中心で心の通い合う医療を行う。
2. 全人的医療と先進医療との調和を図り、人間本位の医療を提供する。
3. 予防・健康医学などに積極的に取り組み、地域医療や福祉の向上に寄与する。
4. 病める人の人権を尊重し、生命の尊厳がわかる人間性豊かな医療人を育成する。
5. 未来の医療を創造し、その成果を国内外に発信する。

実施体制



WG：ワーキンググループ

環境目標及び実施計画並びに評価結果(平成21年度)

平成22年3月31日

目 標	実施計画	自己評価	
		学部	病院
環境教育等の充実	■「環境科学」、「環境保健学総論」等の講義開講	◎	—
	■医療廃棄物処理施設での実地学習	◎	—
	■環境問題についてオープンキャンパス模擬授業の実施	◎	—
	■環境に関する研究	◎	—
	■大学敷地内全面禁煙	○	○
エネルギー等の削減	■旭川市都市計画審議会委員として地域社会への貢献	◎	—
	■学内放送等により節電を呼びかける (学内放送と職員による学内点検を行う)	○	○
	■照明の適正管理 (各室内不在時の消灯、残業時不要箇所の消灯等)	○	○
	■地下水利用の計画	○	○
	■両面プリンターの導入促進 (用紙の両面利用「コピー・プリント」の呼びかけ)	○	○
廃棄物の削減	■ペーパーレス化の推進 (学内連絡・会議資料のメール配信)	○	○
	■廃棄物分別の徹底及び回収 (実験系廃棄物・医療系廃棄物・一般廃棄物)	○	○
	■不要物品の学内再利用の推進	○	○
	■実験廃液の回収の徹底	○	—
	■不要薬品の処分の徹底	○	○
その他	■再資源可能ゴミの回収の徹底	○	○
	■夏期及び冬期の室内温度の徹底(病室は除く)	○	○
	■隣接階のエレベーター使用を控える(患者さんは除く)	○	○
	■環境改善対策実験用附帯機器の改善	◎	◎
	■ガスボンベの安全管理	○	○
	■薬品の安全管理	○	○

注:自己評価の、◎印は目標を充分達成している、○印はおおむね達成している。
—印は該当なしを示す。

大学における社会・環境への貢献

教育・研究における社会・環境への配慮

旭川医科大学では、地域社会への貢献や環境配慮への意識が高い医療人を育てるため、カリキュラムの枠を超えて学びの機会を作っています。



(ミヤマリンドウ)
低山から亜高山帯の、日当たりが良く背の低い草地に生える、背丈10cm程度の多年草。遅めに咲く花で、茎先端に複数咲かせる事が多い。



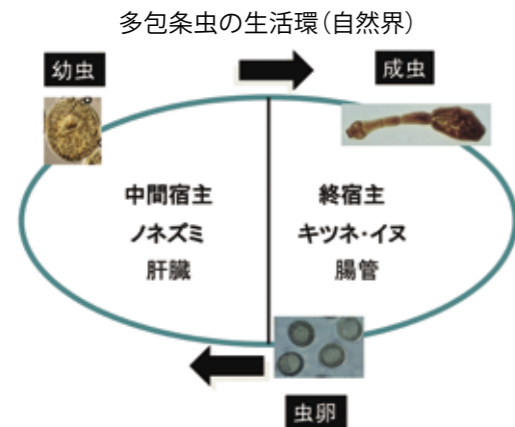
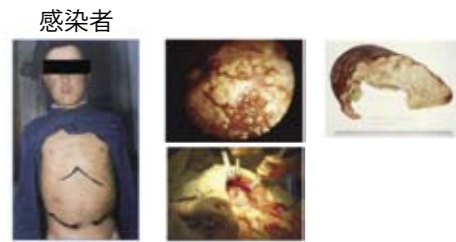
エキノコックス症の研究：北海道から全世界へ

エキノコックス症とは

エキノコックス症は主に肝臓に発症する寄生虫疾患で、表面不整で硬い腫瘤を形成する多包虫症と、平滑な嚢胞内に水(包虫液)が溜まる単包虫症があります。

多包虫症は熱帯地域を除く北半球のほぼ全域で流行していますが、国内ではこれまでのところ北海道特有の地方病です。道内に生息しているキタキツネやイヌから排泄されるエキノコックス条虫(多包条虫)の虫卵をヒトが何らかの機会に経口摂取して感染が成立します。毎年約20人前後の新規患者が認定され続けており、今後の増加が懸念されています。

多包虫の病巣はがんと同様にできるだけ早期の診断と治療が大変重要なポイントとなります。しかし、これまで外部評価、客観評価に見合う信頼性の高い血清検査法が確立されていませんでした。



寄生虫学講座での最近の活動

本講座はWHOエキノコックス症非公式作業部会における「アジアにおけるエキノコックス症免疫診断、遺伝子診断レファレンスセンター」に指定され、全世界の専門機関との共同研究としてエキノコックス症に関する血清検査法の開発を進めてきました。現在、治療が必要になる活性病巣を有すエキノコックス症をほぼ100%近く確認できる唯一の検査法と評価される検査法が確立されています。WHOエキノコックス症ガイドラインの免疫診断の章をスイスのGottstein教授と共著で執筆しています。

また2010年に入り、米国疾病情報対策センター(CDC: Centers for Disease Control and Prevention)から米国民のスクリーニング、確認検査法として利用させてほしい旨の要請が届いています。さらに9月には、米国Colorado州のBoulder市から、姉妹都市である中国チベット自治区のラサ市内の基幹病院で、本学で開発された迅速診断キットを用いたエキノコックス症に関する血清検査法の指導と教育講演を要請され、引き受けています。

寄生虫学講座の4つの成果

(1) 血清検査法(多包虫症)

①この検査法は特異性が非常に高く、1度の検査でほぼ95%以上の確率で患者様を特定できます。エキノコックス症以外の疾患でこの検査法で陽性になることはほとんどないことも画期的な点です。

②治療後の予後判定モニタリングに応用することにより、病巣が完全に取り除かれているかどうかを半年以内に判定することも国内外の機関との共同研究から判明しています。

③特別な設備を必要とせずに血液一滴から20分以内で結果が出る、非常に信頼性の高い迅速検査キットも開発されています。この迅速検査法開発研究は2007年度から文科省特別予算の事業として展開され、迅速検査キットは完成しています。2010年夏から「北海道内3大学の橋渡し

先端医学・医療研究における実用化に向けた、道内3大学病院での外部評価」が始まります。

本州その他道外の地域住民が北海道旅行後にエキノコックス症に罹患し、臨床医も患者もエキノコックス症には思い至らず、外科治療後に確認される症例が今後増えるかもしれません。2010年に関西で、約30年前に1度だけ道内バスツアーに参加した中年女性がこのキットでエキノコックス症と確認されました。

このキットの有用性が客観的に評価され、スクリーニング、確認検査に広く用いられる日が来れば、エキノコックス症と他の疾患の鑑別キットとしてベッドサイドでの利用も含め、道民、国民にとっての朗報になるでしょう。流行地域住民の経済的負担と精神的負担、苦痛を大幅に軽減できる信頼性の高い検査法を北海道内の住民検診、海外の流行地の住民に自由に応用できる時代がまもなくやってきます。

(2) 血清検査法(単包虫症)

単包条虫は牧畜が盛んな全世界で流行し、ヒトへの感染源はイヌです。それゆえ、感染者の数は多包虫症と比較にならないほど多いのです。単包虫症に関する血清検査法でも、診断抗原の特定、遺伝子クローニング、遺伝子組み換え抗原作製、診断用抗原としての評価研究を通して、現在、国際的に極めて信頼性が高いものを確立し、迅速検査キットが開発されています。上記のチベットでの血清検査法の指導は単包虫症ならびに多包虫症に関するものです。

(3) 遺伝子診断法

全世界に分布しているエキノコックス条虫の遺伝子解析を展開し、これまで曖昧になっていた種の再検討を試みました。この中で、中国チベット高地から新種エキノコックス条虫(*Echinococcus shiquicus*)を発見し、またアフリカのライオンに寄生するエキノコックス条虫も独立種(*Echinococcus felidis*)として再評価しました。このような基礎的な研究からヒトへの病原性を遺伝子レベルで解析することも可能になるかもしれません。

これらの実績に基づき、2000年から2005年、引き続いて2005年から2008年までの計8年間、米国立衛生研究所

(USA-NIH)の「RO1感染症の伝搬生態、疫学研究：中国におけるエキノコックス症研究」(代表、英国サルフォード大学Craig教授)の血清診断、遺伝子診断責任者として参加してきました。USA-NIH研究費による2005年以降の研究成果として発表された約60編の国際共同研究論文のうち30編以上の論文に参加しております。現在は未公表の研究成果のまとめ(論文公表)に追われています。

(4) 病態解析

摘出直後の病理標本を用いる実験動物への感染実験、病態を異にするエキノコックス包虫の実験室内での維持を含めた病態解析の研究も実施されています。現在、実験動物体内での新種エキノコックス、多包虫、単包虫の比較発生学的研究、新しい治療法の開発研究を展開しています。

世界の研究をリードする拠点として

本学では、画像所見と血清検査所見に基づいて患者様を確認することで早期治療を試み、さらには外科的に切除された肝病巣の病理所見に加え、そこからの遺伝子検査を実施しています。これらすべての検査を実施し、臨床、基礎講座、病院が総合的に診断治療にあたる医育、医療機関は現在、世界でも本学だけでしょう。

文部科学省の科学技術振興調整費「国際リーダーシップの確保：アジアにおける難治性寄生虫病流行戦略」(2003-2005)、「国際共同研究の推進：難治性寄生虫病に関する遺伝子診断法の開発」(2010-2012)、日本学術振興会の「アジア・アフリカで流行している人畜共通寄生虫病研究拠点形成(アジア・アフリカ学術基盤形成事業)」(2006-2008)、「アジア・アフリカで流行している人畜共通寄生虫病研究拠点形成 II(アジア・アフリカ学術基盤形成事業)」(2009-2011)を通して、アジアのみならず全世界から若手研究者を受け入れ、技術移転を通して国際交流、研究者ネットワークを構築してきています。主な目的はEvidence based Medicineの立場からエキノコックス症、脳嚢虫症患者の確認と予防対策を通しての環境問題への取り組みです。



学生に対する環境関連の教育

学生への教育理念

本学の教育理念は「豊かな人間性と幅広い学問的視野を有し、生命の尊厳と高い倫理観を持ち、高度な知識・技術を身につけた医療人及び研究者を育成する。また、地域医療に根ざした医療・福祉の向上に貢献する医療者を育てる。さらに、教育、研究、医療活動を通じて国際社会の発展に寄与する医師及び看護職者の養成に努める。」です。その教育理念のもと、教育・研究・地域貢献に取り組んでいます。

医学科における環境教育

医学科第3学年必修科目「臨床医学概論II」において、環境保健学総論、環境破壊と人の健康として22の講義を行い、人を取り巻く環境と人の健康との相互作用について再認識することを目標とします。この中で、最近のトピックスとして内分泌かく乱化学物質による健康障害、シックハウス症候群についても触れています。人の健康の保持増進に携わる医療人としての環境保全に対する正しい認識と行動における責任を学ぶことを目指します。(2010年度医学科履修要項P79)

旭川ウェルビーイング・コンソーシアム「健康体感教室」

健康の維持には「運動」「栄養(食)」「休養」の3要素のバランスが大切です。旭川地域は、四季明瞭な気候、良好な空気、水、森林、田園等の自然環境や温泉などの保養施設に恵まれ、また、肥沃な大地に産する良質な農産物も豊富で、運動・食・休養には好適な立地にあります。旭川ウェルビーイング・コンソーシアム(以下AWBC、P11参照)は、こうした地域の健康資源を活用しながら主体的な健康づくりへの気付き(動機付け)をテーマに取り組む「健康体感教室」を、旭川市保健所と共同で開催しています。現時点ではAWBC所属の学生が対象ですが、将来的に一般市民や、旭川を訪れる旅行者にも展開することを視野に入れています。

2010年7月10日に、里山での自給自足生活の体験の提供

廃棄物処理の現場を見学

医学科第2学年必修科目である「生命科学実習V」の中で、環境衛生学実習として産業廃棄物および医療廃棄物処理施設を訪れる取り組みを行っています。産業廃棄物の処分場では、各種リサイクル法に基づき、リサイクル可能品目を分別することで処分場の使用可能年数を延ばし環境への負荷を減らしていることを学びます。また、医療廃棄物処理施設では、処理現場を見学し、担当者による説明と討論を通して、特に医療機関の診療活動によって排出される医療廃棄物の不適切な分別や排出法による事故について考える機会を提供しています。将来、医療現場において安全性・環境保全性を考慮した適切な排出を心掛けることが、廃棄物処理に従事する作業者の健康の保持、さらには地域住民が生活する環境の保護につながる必須の基本事項であるという認識を高めることを意図しています。通常の講義では得られない処理場で起きている廃棄物に対する問題点を直接聞くことができる貴重な経験として学生からも好評を得ています。

施設と、有機・減農薬農業に取り組み加工食品やレストランを運営する2つの農業法人を訪れました。経営者の方から自然、健康、食に対する思い入れを聞き、里山を散策しながら運動と自然に親しみ、こだわりの野菜栽培の現場を見学しました。また、現場で収穫された食材で作られた昼食を取りながら、旭川市保健所の栄養士、保健師、旭川医科大学の教員から運動・食・休養に関する講話を聞き、楽しく有意義な1日となりました。旭川医科大学からは、吉田貴彦教授と中木良彦助教が講師を務めました。



AWBC学生組織「はしっくす」の環境関連の活動

AWBCの学生組織として「はしっくす」が結成されています。代表を旭川医科大学の学生が歴任するなど、本学が中心的な役割を担っています。多岐に渡る活動の中では、環境に関する学習・公演・イベントなども多く行っています。

1) 2009年11月7日に、HI・RO・BA(P12参照)で「地域から水問題を考えよう!」ワークショップを、市民、環境関連のNPO法人や学生団体など12名が参加し、本学吉田成孝教授も同席して開催しました。「水」をキーワードとして、国内及び海外の環境に関する活動の紹介など、地域から世界に向けての連続的な環境問題の目を養うワークショップでした。なお、本企画は北海道新聞(2009年11月5日付)に開催予告として掲載されました。



2) 2010年4月に本学第5学年佐藤裕基(はしっくす初代表)がブルネイで開催された「ASEAN+3 Youth Environment Forum」に北海道から1名参加し、地球温暖化と気候変動といった世界的環境問題に関して意見交換を行う機会を得ました。その成果とそれに関わる講演会:「世界に羽ばたく若者の力〜グローバルの視点から環境問題を考えて〜」を2010年6月5日と20日の2回、HI・RO・BAで開催しました。

3) 2010年5月8日に、北海道の学生組織である全道連携ゴミ拾い会議の企画による「全道連携ゴミ拾い〜きれいな北海道を作るためのきっかけづくり〜」において、旭川では

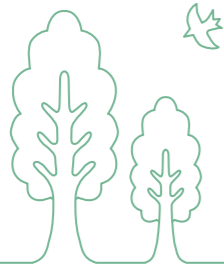
「はしっくす」が東神楽町と連携して実施しました。この企画は全道3都市にて同日、同時間帯に行うことで、ゴミ拾いという「ローカルな活動」が「グローバルな視点」、つまり地球環境の向上に貢献できているのかを考える機会となるように工夫して行ったものです。清掃活動後に桜の苗木の植樹を行い、さらに東神楽町長はじめ町関係者の参加のもとに、キレイな東神楽をつくるためのスローガンを考案し「キレイはえがお〜ごみが減ればえがおがふえる〜」を決定しました。このイベントには、町民を含め30名ほど、本学吉田貴彦教授が参加しました。



4) 2010年7月24日に、佐藤裕基はしっくす初代表がファシリテーターとして、米国で開発され日本では(財)河川環境管理財団がライセンス契約を結んでいる教育プログラムを指導する資格であるエドゥケーター資格を授与する講習会「プロジェクトWETエドゥケーター講習会 in あさひかわ」をHI・RO・BAで開催しました。



(エゾノハクサンイチゲ)
高山の草地に生える多年草。7月はじめに北海道各地の高山で満開となったエゾノハクサンイチゲの群落を目にすることができる。



JICA アフリカ地域・地域衛生担当官のための保健行政

2008年度から、JICA札幌事務所の担当研修として、「アフリカ地域 地域保健担当官のための保健行政」を本学北村久美子教授、吉田貴彦教授のコーディネーターで実施しています。この研修において研修生からの希望の高かった環境に関する講義と医療廃棄物を含む廃棄物処理、廃棄物焼却場、プラスチックおよび古紙のリサイクル施設の見学について2010年度から企画実施しました(2010年8月3～5日)。

アフリカ地域では衛生・環境状況が良くない状況にあり、感染症をはじめとした多くの疾患により国民寿命は低く、妊産婦死亡や乳児死亡も高率です。さらに、人々の生命にかかわる最前線となる医療機関・保健機関の医療廃棄物ですら、敷地内に放置ないし埋め立てるだけの処理にとどまり、事故や環境汚染が起っています。

こうした現状に基づき、アフリカ地域における今後の開発や医療施設の充実により問題となりうる「医療廃棄物」と感染症対策に必須の「衛生的な水の確保」について、日本の処理方法や取り組み、問題点について、施設の見学と担当者による説明を通して考える機会を提供しています。また、今後の経済発展により廃棄物の増加が見込まれる地域であるため、適切な分別やリサイクルの必要性、省資源化について現場視察と討論を実施しています。我が国での環境・水の保全、廃棄物処理について学ぶことで、アフリカなどの発展途上国の地域衛生の向上に役立てられることに貢献できると期待されています。



日本製紙の見学



カンディハウスの見学



旭川市近文リサイクルプラザの見学

環境関連調査

国民の緑や森林に対する意識について

(社)国土緑化推進機構の2009年度「緑と水の森林基金」事業助成金を受けて、特定非営利活動法人(NPO)健康保養ネットワークが、「森林の健康増進効果と調査とその普及」と題する事業を行い、NPOの副理事長である健康科学講座の吉田貴彦教授が事業代表を務めました。事業の内容は、2009年度に和歌山県和歌山市および北海道札幌市での「国土緑化・森林環境にかかわる講演会」の開催、国土緑化・森林環境の健康影響に関する専門家による研究成果報告書の作成、森林・緑に対する「国民知識意識意向学術調査」からなります。

本事業の意識調査の結果によると、幼小児期における

森林・緑への好感的な接し方や、日常生活で木質に親しみやすい環境が、成人後の森林や緑に対する好感度を高め、自然資源の保護と統制のとれた森林資源の利活用を求める意識につながっていることが分かりました。さらに、成人になってからの生活習慣が健康維持に対して良好となる傾向が見られました。自然・資源などを大切にすする心(意識)が自らの心身をも大切にすることにつながっているとも考えられ、木育の意義が確認できました。

国民の健康度を向上させるためにも、代替医療の範疇に含まれる森林の保健への活用や森林療法などを国民の健康づくりに利用させることを啓発していきたいと考えています。

シックハウス症候群の研究—全国疫学研究への参加

全国6地域(北海道、福島、名古屋、大阪、岡山、福岡)が参加するシックハウス症候群の疫学研究が厚生労働科学研究費補助金(健康安全・危機管理対策総合研究事業「シックハウス症候群の原因解明のための全国規模の疫学研究」)により行われており、本学の西條泰明教授が分担研究として参加しています。

旭川地区では2008年の小学生におけるシックハウス症候群に関するアンケート調査に続き、2009年は小学生の自宅のホルムアルデヒドや揮発性有機化合物(VOC)の濃度やダニアレルゲン、微生物由来揮発性有機化合物

(MVOC:主に真菌が発生する化学物質)、エンドトキシン(細菌由来の物質)、βグルカン(真菌由来の物質)を測定しました。生物学的な要因が室内での健康に影響していないか、今後は他の地域の状況と合わせて解析する予定です。

また、2009年9月に研究班の成果である「シックハウス症候群に関する相談と対策マニュアル(日本公衆衛生協会)」が刊行されました。本書はシックハウスの考え方、原因やその対策をわかりやすく解説したものになっています。



(エソコザクラ)
お花畑を代表する花の一つで、森林限界より上部に見られ、雪田や湿性草原中に群生する。草丈は10cm程度で、根際に10枚前後の鋸歯のあるへら形の葉がある。



(ホソバウルップソウ)
砂礫地や草原に生える多年草で、大雪山を代表する花の一つである。穂状についたたくさんの小さな青紫色の花が下から上へと咲きあがる。

社会・環境コミュニケーション

旭川医科大学は旭川を中心とした地域社会の発展に寄与するため、医療やその他の分野に及ぶ啓発活動のほか、地域のさまざまな事業への協力・参加を行っています。



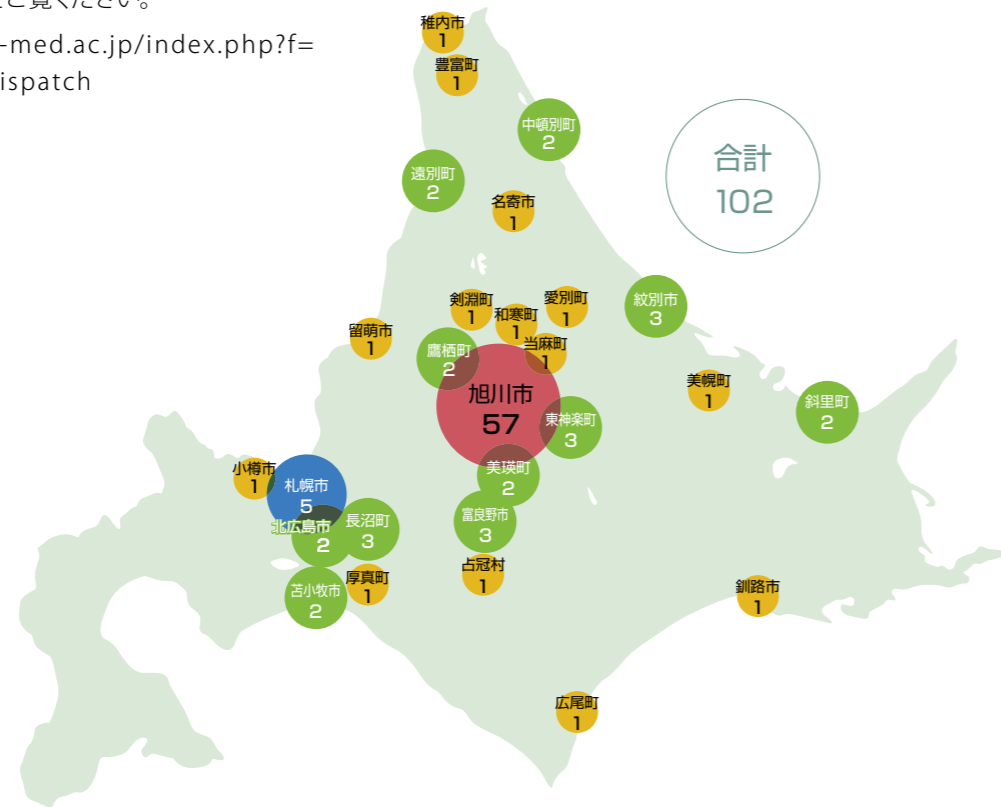
旭川医科大学派遣講座実施状況

旭川医科大学では、社会の求めに応じられる良い医師・看護職者の育成や、教育・研究・診療の活性化、そして地域社会との連携の強化を目指し、改革の努力を続けています。

このような趣旨の下、本学では地域社会への知的啓発活動の一環として、また地域社会の生涯学習ニーズに応えるため、地域住民を対象とした派遣講座を実施しています。

派遣講座は、本学の教員等が地方公共団体、高等学校などの求めに応じて講演を行うもので、300を超える講座を用意しています。内科・外科など臨床医学分野をはじめとして、身近な問題である健康や生活習慣病、今後重要性を増すと考えられる高齢者や子どもに関する講座など、多彩な医学分野を取り扱っています。また、医学にとどまらず英語や歴史といった一般教育、高等学校向けの医学職への進路、青少年の諸問題といった講座もリストに加わっています。

詳細は本学ウェブサイトをご覧ください。
http://www.asahikawa-med.ac.jp/index.php?f=cooperation+public_dispatch



旭川地域における社会貢献

本学教員は、2009年度においても、以下のとおり旭川市における地域のさまざまな事業に対して積極的に関わり、社会的貢献を果たしています。

(1)旭川オープンカレッジ運営委員

旭川における学術研究と高等教育の充実発展及びそれらの市民への還元を目的として、旭川医科大学、北海道教育大学旭川校、北海道東海大学旭川校、旭川大学、旭川大学女子短期大学部および旭川工業高等専門学校と旭川市が設置したのが「旭川オープンカレッジ」です。その事業の円滑な実施を図るため設置された委員会、事業計画などについて審議しています。

(2)旭川市社会福祉審議会委員

旭川市の高齢者、障害者等の社会福祉施策に関する事項について、調査審議を行うために設置された審議会です。

(3)旭川市総合開発計画審議会委員

旭川市では、「第7次旭川市総合計画」の中間年度となる2010年度に同計画の見直しを行うことになっています。旭川市総合開発計画審議会委員として、その見直しの内容について審議し、その結果を市長に答申する予定です。

(4)旭川市建築審査委員会委員

建築基準法に基づき、建築許可に係る同意、処分に対する不服の審査請求に対する裁決、法の施行に関する重要事項の調査審議等を行う機関として設置された委員会です。

(5)旭川市男女共同参画審議会委員

「旭川市男女平等を実現し男女共同参画を推進する条例」に基づき設置された審議会です。男女共同参画の推進に関する基本計画や取り組みなどに関して調査、審議を行っています。

(6)「女性の健康支援事業」企画評価委員会委員

旭川けんこう応援プラザを中心に実施された健康に係る情報提供、健康イベントの開催、講演会開催などの事業についての助言を行うために設置された委員会です。

(7)旭川市井上靖記念館運営協議会委員

井上靖に関する資料の収集・保存および展示を行い、市民の文学研究に資するとともに、教育及び文化の向上に寄与するために設置された井上靖記念館の運営等について協議しています。

(8)旭川市献血推進協議会顧問

旭川市における衛生行政の一環として、医療に要する血液の安定供給を確保する体制を確立し、血液事業の正常な発展を期するため、広く市民各層の間に献血思想の普及徹底を図ることを目的として設立された協議会です。

(9)旭川市地域ICT活用モデル構築事業運営協議会

総務省地域ICT活用モデル構築事業の実施に伴い、旭川市において設置された協議会です。医療分野と情報技術分野、検診情報とデータ管理のほか、地場農産や観光におよぶ経済の活性化など、地域医療におけるICTの利活用から地域活性を目指し、構築モデル事業の発展について協議しています。

(10)旭川市開村120周年記念事業実行委員会委員

1890(明治23)年に旭川・神居・永山の3村が置かれてから本2010年で120年を迎えます。2010年秋に予定されている旭川市開村120周年記念事業の準備を行うために設立された委員会です。

(11)北彩都あさひかわ開発促進期成会副会長

北彩都あさひかわにおける都市拠点機能の充実及び強化、都市部活性化、地区景観の形成など、にぎわいと潤いのある都市拠点を創出する事業の円滑かつ効率的な推進を図ることを目的として設置された会議で、開発整備事業の推進などに携わっています。

病院における 社会・環境への貢献

道北・道東唯一の特定機能病院である旭川医科大学は、地域の医療の拠点としての役割を持っています。そのため、質の高い医療サービスの提供を目指し、常に知識・技術の向上に取り組んでいます。



(メアカンキンバイ)
北海道の高山の礫地に生育する多年草。レモンイエローの花と、深く切れ込みの入った淡緑色の葉が特徴。

地域がん診療連携拠点病院としての活動

がん診療のレベル向上を目指す

2009年、旭川医科大学病院は地域がん診療連携拠点病院に指定されました。拠点病院に求められているのは、化学療法・放射線療法を含めた集学的・標準的治療の提供、治療初期からの緩和ケアの実施、がん医療の均てん化の推進、がん登録の推進、がん医療に関する相談支援・情報提供、地域医療機関との病連携・病診連携の整備などです。

こういったがん拠点病院の目的実現に向けて、地域医療者・一般市民のがん診療に関連した知識の習得およびがん診療レベル向上のため、各種講演会、研修会、セミナーを開催しました。昨年度は肺がんに関する講演会および緩和医療に関する研修会を開催しました。また、院内の医療者・学生を対象に、各診療科医師等の協力を得て、セミナーを月1回定期的に開催し、最新のがん薬物療法や新規抗がん剤、がん患者支援等に関する情報提供を行うとともに、がんに関する診療科・職種横断的な情報交換を行っています。

旭川市内の3拠点病院と連携

また、旭川市内に旭川厚生病院、市立旭川病院および本院の3病院が拠点病院に指定されたことから、個々の拠点病院がばらばらに活動するのではなく、連携・情報交換しながら周辺地域を含めた道北全体のがん診療レベル向上に寄与できるよう、道北がん拠点病院連絡協議会を設置しました。各病院の相談支援センターからの情報より、患者・家族の要望が高かった「セカンドオピニオン」をテーマにした市民向けの公開講座を3病院で共同して開催しました。また、各病院独自の市民公開講座の内容も重複しないよう調整し、本院では「外来で行うがん治療」をテーマに行いました。

旭川の3拠点病院には道北にある五つの二次医療圏をカバーすることが求められており、2009年は3病院で分担して稚内、富良野、名寄の医師会の協力のもと、地元医療者を対象とした講演会を開催しました。本院は、名寄市で

地域医療者へがん拠点病院の役割やがん診療に関する情報提供を行いました。2010年は、留萌市で開催することが決まっています。

また、最近では、拠点病院からの一方的な働きかけではなく、旭川医師会の医師たちとの情報交換を行いながら拠点病院と市内医療機関との連携作りを目指す活動を開始しています。まずは、拠点病院と市内の医療機関との間に信頼ある連携関係を築くための第一歩として、終末期がん患者の連携に関する活動を共同して行っています。今後はがん診療連携パスの運用が控えており、こういったかかりつけ医との緊密な関係構築が重要になるものと考えています。

がんと闘う方々を支えるために

がん治療を受けている方々や家族の皆さんの抱える悩みに対する対応や、がんに関わる情報の提供・発信も重要な役割のひとつで、これらの対応をがん診療相談支援センターで行っています。がんに関するいわゆるよろず相談にとどまらず、がんの病態、標準的治療法、がんの予防・早期発見等に関する情報も提供しています。さらに、がん患者の皆さんから要望の多い患者サロン開設に向けて準備しているところです。

本院では、がん診療の現状を正確に把握するため院内がん登録を積極的に推進しています。2008年1月1日以降に新規にがんと診断されたものを対象に、医師の協力の下に診療情報管理士がデータを登録しています。2008年の集計で1,300例を超える登録数となり一部をホームページに公開しています。院内がん登録のデータは、院内で活用するとともに北海道の地域がん登録事業及び国立がんセンターのがん対策情報センターにも提供されています。

みなさまの声を聞くために

旭川医科大学病院では、毎年1回、「患者満足度調査」を実施しています。患者様の評価した結果を指標として医療の質を見直し、改善点を見つけることでさらなる医療サービスの向上を目指しています。

●医師に対する評価

平成20年度		平成21年度					
回答数	満足度	回答数	満足度	内訳			
				診療	説明	質問	応対
632	98.5	603	98.1	98.8	98.1	97.3	98.0

※回答数は、診療科が確認できた件数です。

[評価項目の内容]
診療:診療行為に関する満足度
説明:症状や治療方針等に関する説明のわかりやすさ
質問:質問や相談のしやすさ
応対:応対(言葉遣い、態度等)に対する満足度

[集計方法]
各設問ともに、回答は特に記載がない限り「非常に満足/満足/どちらともいえない/不満/非常に不満」の5項目です。このうち、非常に満足・満足・どちらともいえない、の回答は満足として集計しています。この他の設問においても同様です。

●看護師に対する評価

平成20年度		平成21年度					
回答数	満足度	回答数	満足度	内訳			
				看護	説明	質問	応対
557	98.1	551	96.8	96.9	97.6	96.5	96.1

※回答数は、病棟が確認できた件数です。

[評価項目の内容]
看護:看護度の適切さに対する満足度
説明:入院生活・計画等に対する説明のわかりやすさ

質問:質問や相談のしやすさ
応対:応対(言葉遣い、態度等)に対する満足度

●中央診療施設等に対する評価

職種	平成20年度		平成21年度					
	説明	応対	説明	応対	説明	応対		
薬剤師	528	98.1	477	98.3	484	97.7	468	97.9
放射線技師	396	98.0	416	97.8	382	97.4	390	98.5
検査技師	428	98.6	432	99.3	427	98.6	436	99.5
理学療法士	242	97.1	257	99.2	221	96.4	240	99.6
栄養士	234	96.6	—	—	217	95.4	—	—
事務職員	725	96.3	733	97.4	680	95.4	689	97.4

[評価項目の内容]
説明:薬剤・検査などに関する説明のわかりやすさ
事務職員に関しては、手続きや料金などの説明のわかりやすさ
応対:応対(言葉遣い、態度等)に対する満足度

●全般に対する評価

項目	平成20年度		平成21年度	
	回答数	満足度	回答数	満足度
診療サービス面の全般について	684	98.0	648	97.7
接遇面の全般について	736	98.1	705	97.7
院内環境面全般について	770	98.7	734	98.5
院内施設面全般について	760	98.7	722	99.0
プライバシーへの配慮	726	97.7	679	96.6

●院内の環境および施設面に関する評価

項目	平成20年度		平成21年度	
	回答数	満足度	回答数	満足度
病室の居心地	551	97.8	542	97.0
病室内の設備	546	95.1	541	95.0
病棟の設備	542	96.9	536	96.3
施設等のづくり	530	97.7	526	95.2

※回答数は、病棟が確認できた件数です。

項目	平成20年度		平成21年度	
	回答数	満足度	回答数	満足度
食事の内容	776	92.7	726	93.3
食事の時間や起床・消灯時間	782	95.5	732	95.1
医療機器の設備	703	99.3	678	99.0
トイレ、洗面、バス等の設備	779	98.7	740	97.3
売店、食堂、自動販売機等	737	97.6	710	96.6
整理整頓や清掃等	775	97.5	728	97.7

●本院への推薦

項目	平成20年度	平成21年度
	満足度	満足度
ぜひ勧めたい	63.5	61.3
勧めたい	29.3	31.5
どちらともいえない	4.5	3.1
勧めたくない	1.6	3.0
絶対勧めない	1.1	1.1

●総合評価(点数)

	平成20年度	平成21年度
100点	13.5	12.7
99~90点	53.7	51.7
89~80点	21.3	22.7
79~60点	9.4	10.9
59点以下	2.2	1.9

事業活動にともなう 環境負荷低減への取り組み

大学および病院における各事業にともなう
環境負荷の低減に向けて、
その全体像を把握し、学生・職員とともに
さまざまな取り組みを行っています。



(ヨツバシオガマ)
高山帯の草地に生える多年草。葉は通常、節ごとに4枚輪生し、羽状に深裂する。紅紫色の花が4個ずつ数段に輪生し花穂が長くなる。



太陽光発電について

本学においても、太陽光発電装置を設置しました。発電量は30kWhと少なめですが、CO₂の削減に少しでも役に立てればと思っています。

2009年12月7日より発電の記録を始めました。3月までに約6,000kWhを発電しています。



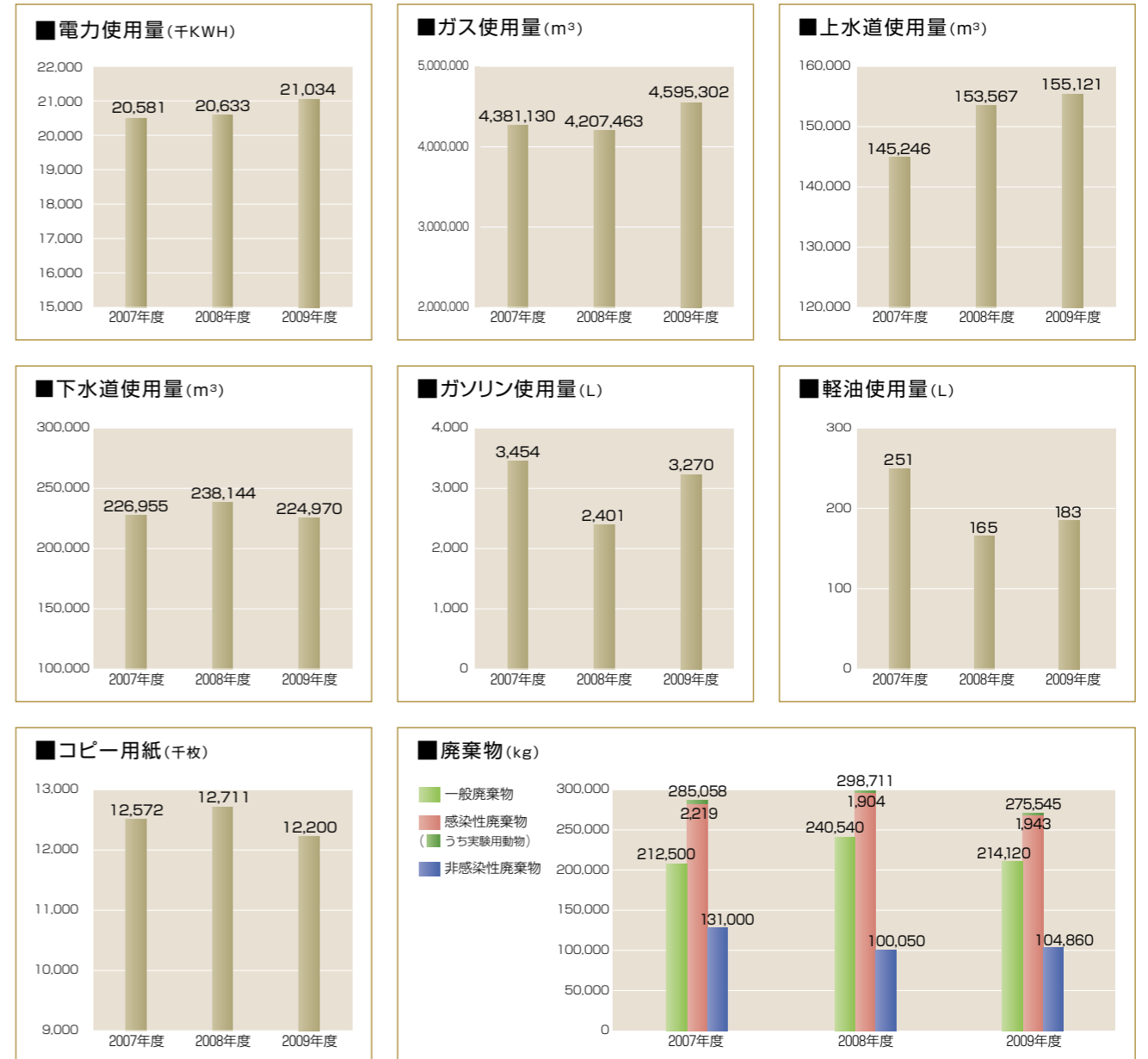
また、本学の中央玄関内にモニターを設置し、皆様に太陽光発電システムの説明と現在の発電量などを表示しています。



エネルギー・資源の使用量

各事業からの環境負荷を、主要な物質ごとの総使用量および2007年度からの使用量の推移を下記に記載します。昨年度と比べて、夏季の外気温が高く冷房用ガスの使用量が増加し、救急車の出動回数増によりガソリン使用量が増加しました。また、コピー用紙は両面コピーや文書の

スリム化により使用量が減少しています。一般廃棄物と感染性廃棄物は分別の徹底により減少しましたが、建物改修工事後の引っ越しの際に非感染性廃棄物(非リサイクルプラスチック)が多く発生しました。



グリーン購入・調達状況など

環境物品等の調達については、国等による環境物品等の調達の推進等に関する法律に基づき、環境物品等の調達の推進を図るための方針を定め、できる限り環境への負荷の少ない物品等の調達に努めています。

これに基づいた、各特定調達品目の調達量等について17分野(189品目)を下記に示します。

※調達実績がない品目に関しては、除外しています。

特定調達物品の調達量

分野	適用(品目)	全調達量	特定品目調達量	特定品目調達率
紙類	コピー用紙等	78,315kg	78,116kg	99.75%
文具類	シャープペンシル等	51,020点	51,020点	100%
オフィス家具等	イス等	1,417点	1,417点	100%
OA機器	コピー機等	511台	509台	99.61%
携帯電話	携帯電話等	8台	8台	100%
家電製品	電気冷蔵庫等	23台	23台	100%
エアコンディショナー等	エアコンディショナー等	2台	2台	100%
インテリア・寝装寝具	カーテン等	170点	170点	100%
照明	蛍光灯等	4,808本	4,808本	100%
作業手袋	作業手袋	93組	93組	100%
制服・作業服	制服等	2,511着	2,511着	100%
役務	印刷等	3,587件	3,587件	100%

監事評価

監事 宮森 雅司

この報告書は、2005年4月施行の「環境配慮促進法」により作成が義務付けられたものであり、本学第5回目の刊行である。

環境配慮促進法第9条第2項では、「特定事業者は、環境報告書を公表するときは、記載事項等に従ってこれを作成するように努めるほか、自ら環境報告書が記載事項等に従って作成されているかどうかについての評価を行うこと、他の者が行う環境報告書の審査を受けることその他の措置を講じることにより、環境報告書の信頼性を高めるように努めるものとする」と定められている。

この法の趣旨を踏まえて、環境報告書の信頼性を高めるために評価を行った。

監事評価にあたっては、環境配慮促進法、同法第8条に基づく環境報告書の記載事項等、及び環境報告ガイドライン2007年版(環境省)を基準として評価した。

旭川医科大学環境報告書2010は、これらの評価基準に沿って作成されており、事業活動における環境配慮の取組状況、重要な環境情報・指標が網羅されていることや数値データの正確性が確認できたこと等から、適正であると評価した。

特に、図書館屋上に太陽光発電装置の設置、省エネ対策として高効率照明器具(Hf)の切り替えや人感センサーの増設は、環境負荷低減への取り組みとして高く評価される。

なお、より良い環境報告書を作成するために、以下の点について検討されたい。

1. 「環境目標及び実施計画並びに評価結果(平成21年度)」(P16)について実施計画に基づいた具体的な取組状況など自己評価(達成度)の基準を明らかにすること。
2. 「グリーン購入・調達状況など」(P27)、「エネルギー・資源の使用量」(P28)について
 - (1)基本方針・目標(数値目標)、計画、取組状況を明らかにすること。
 - (2)エネルギー・資源の使用量のデータは、理解を深めるため、過去3か年ではなく、過去数年(5~10年)における経年変化を記載するとともに、他大学や他の事業所等との比較を記載すること。

以上、本環境報告書に対する監事評価とする

平成22年9月

認証評価認定証



機関別認証評価認定マーク



学校教育法第109条第2項の規定に基づき、(独)大学評価・学位授与機構による「大学機関別認証評価」を受け、平成20年3月27日付けで「大学評価基準を満たしている」との認定を受けました。

BFH認定証



病院機能評価認定証



がん診療連携拠点病院指定書



| 結び | 編集後記 |

旭川医科大学では、本学環境方針に則り、地球環境や地域環境の保全・改善のための教育・研究、診療及び開かれた大学としての社会貢献など、全ての活動を通して環境との調和と環境負荷の低減に積極的に取り組んでいます。

ここに「環境報告書2010」を公表いたします。

今後とも環境保全、改善活動を推し進めてまいります。

環境報告書WG責任者 副学長 飯塚 一

平成22年9月



旭川医科大学

〒078-8510 旭川市緑が丘東2条1丁目1番1号
TEL 0166(65)2111 FAX 0166(68)2169
<http://www.asahikawa-med.ac.jp/>